

Title	「『わざ』を知る」とは何か：世阿弥の「花を知る」を中心に
Sub Title	What is the knowledge of performance? : focus on "Knowing flower" in "Fushikaden"
Author	生田, 久美子(Ikuta, Kumiko)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1984
Jtitle	哲學 No.79 (1984. 12) ,p.147- 165
JaLC DOI	
Abstract	The purpose of this study : To clarify the form of knowledge of performance, which has been construed as technique or skill. In order to discuss on the question above, I examine some statements on mastering NO presented by Zeami in his work "Fushikaden", from the point of view of the theory of knowledge. Plan ; (1) "Fushikaden", chapter 3 'Questions and answers' "To know NO is no other than to know flower" (A) How do we interpret this statement? (Can we consider that "knowing" as the same sort of ordinary use of "knowing?)" (2) How do they answer the question above from the point of view of the theory of knowledge? (A) The outlook of the theory of knowledge (knowing how knowing that) (B) Is "Knowing flower" knowing how or knowing that? (3) Proposal of a new form of knowledge (A) Analysis of the statement "Seeds are techniques and flower is heart" (B) "To know real flower" is to know two kinds of flower, which are flower of skill and flower of reasons. (C) "knowing flower" is a kind of procedural knowledge, in which propositional knowledge is tacitly embedded.
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000079-0147

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『わぎ』を知る」とは何か

—世阿弥の「花を知る」を中心に—

生 田 久 美 子*

WHAT IS THE KNOWLEDGE OF
PERFORMANCE ?

—FOCUS ON “KNOWING FLOWER” IN “FUSHIKADEN”

Kumiko Ikuta

The purpose of this study :

To clarify the form of knowledge of performance, which has been construed as technique or skill. In order to discuss on the question above, I examine some statements on mastering Nō presented by Zeami in his work “Fushikaden”, from the point of view of the theory of knowledge.

Plan;

- (1) “Fushikaden”, chapter 3 ‘Questions and answers’ “To know Nō is no other than to know flower”
 - (A) How do we interpret this statement? (Can we consider that “knowing” as the same sort of ordinary use of “knowing”?)
- (2) How do they answer the question above from the point of view of the theory of knowledge?
 - (A) The outlook of the theory of knowledge (knowing how & knowing that)
 - (B) Is “Knowing flower” knowing how or knowing that?
- (3) Proposal of a new form of knowledge
 - (A) Analysis of the statement “Seeds are techniques and flower is heart”
 - (B) “To know real flower” is to know two kinds of flower, which are flower of skill and flower of reasons.
 - (C) “knowing flower” is a kind of procedural knowledge, in which propositional knowledge is tacitly embedded.

* 東京教育専門学校専任講師・慶應義塾大学大学院社会学研究科博士課程修了

『わざ』を知る」とは何か

はじめに

本稿の目的は、一般に身体的技能の習得としてとらえられている「『わざ』を知る」とは一体何か、その「知る」の形態を明らかにすることにある。この問題を考察するにあたって、本稿では、『風姿花伝』の中に世阿弥によって提示されている、「花を知る」に代表される「能を知る」ことの本質に関わる言明を取り上げ、この言明を知識論の観点から吟味することによって、「『わざ』を知る」の解明の一つの手がかりにしたいと考えている。

第一章

まずは、『風姿花伝』の中「第三問答條々」の一節に目を向けていただきたい。

『問。能に花を知る事。この條々を見るに、無上の第一なり。肝要なり。または不審なり。これ、いかにとして心得べきや。

答。この道の奥儀を極むる所なるべし。一大事とも秘事とも、ただ、この一道なり。先ず、大方、稽古、物学の條々に委しく見えたり。時分の花、聲の花、幽去の花、かやうの條々は人の目にも見えたけれども、その態より出で来る花なれば、咲く花の如くなれば、また、やがて散る時分あり。されば、久しからねば、天下に名望少し。ただ、誠の花は、咲く道理も、散る道理も、心のままなるべし。されば久しかるべし。

この理を知らん事、いかがすべき。もし、別紙の口伝にあるべきか。ただ、煩はしくは心得まじきなり。先ず、七歳より以来、年来稽古の條々、物まねの品々を、よくよく心中に当てて分ち覚えて、能を盡し、工夫を極めて後、この花の失せぬ所をば知るべし、この物数を極むる心、即ち、花の種なるべし。されば、花を知らんと思はば、先ず、種を知るべし。花は心、種は能なるべし。……』⁽¹⁾

世阿弥が、問答の形式をとって、ここで言わんとしていることを要約するならば、能という一つの「わざ」の体系をきわめること、すなわち、能を演者の立場で「知る」ということは、「誠の花を知る」ことの一事につきる、ということである。

世阿弥の伝書は、現在二十一種にもわたっているが、その中『風姿花伝』は、いかにして能という「わざ」を知るか、という課題を「花を知る」の一事にしばって追究したものであるとされている。

では、『風姿花伝』の中に世阿弥によって示されている「能を知る」という言明、花を知るという言明を私たちはどのように解釈したらよいのであろうか。世阿弥が「能を知る」、「花を知る」と言う場合の「知る」は、現在私たちが日常的に用いている「知る」という概念と同一のものとしてとらえてよいのか。それとも、全く次元を異にする概念ととらえるべきなのか。こうした疑問に対して、従来の知識論はどのような答を用意することができるのであろうか。

まずは、私たちが現在関心をもっている「知る」という問題が、哲学においてこれまでどのように扱われてきたのか、従来議論されてきた「知る」の枠組を概観することから始めたい。しかる後に、その枠組で世阿弥の示す「知る」が果して十分に説明できるのか否かを吟味したい。

(1) 哲学における「知る」の枠組

— Knowing that と Knowing how

「知識とは一体何か」、「人間がある事柄を知っているとは一体どういう状態であるのか」、こうした問いを初めて発したのは、周知のごとく、ソクラテスである。彼はアテナイの若者テアイテトスと「知識とは何か」について対話を試みたが、そこで検討された「真なる思いなしに言論のともなったもの」という「知識」の定義は、最終の結論ではなかったとしても、以後「知識とは何か」を問う者が必ず観みるべき伝統的な答としてみなさ

『わざ』を知る」とは何か

れている。⁽²⁾「真なる思いなしに言論のともなったものが知識である」というソクラテスの言明は、現代においても「知る」における「信」、「真」、「証」、の三条件という言葉に言い換えられて問題にされており、例えば、A. J. エイヤー⁽³⁾、R.M.チゾルム⁽⁴⁾、I. シェフラー⁽⁵⁾といった哲学者たちは、「言論」、すなわち「証」の条件をどのように規定すべきかに努力を払ってきた。三条件の各々について詳細な議論をすることは本橋の目的ではないので、ここでは「知る」の枠組の概観を提供することにとどめておきたい。

「知る」における三条件とは、簡単に言うならば、すなわち「ある人間がある命題Qを知っている」と第三者Yが言う場合、第一に、XがQという命題が真実であると信じていること、第二に、XがQという命題が真実であると信じるにふさわしい証拠を有していること、そして第三に、Qという命題が真実であること、この三つの条件を意味している。

こうした従来の「知る」の分析に加えて、私は第二十四回教育哲学会において、H. H. プライスの信念論⁽⁶⁾を手がかりにして、新しい「知る」の条件の提示を試みた⁽⁷⁾。その概要は次の通りである。すなわち、「ある人間Xがある命題Qを知っている」かどうかを判定する場合、上記の「知る」の三条件に従うならば、XはQという命題を信じていることが第一の条件である。しかし、「信じている」とは言っても、さらに、「受容」の状態、「意見」の状態、「確信」の状態といった「信じる」の深まりの程度に応じた区別をすることが必要ではないかと考えたのである。「受容」の状態とは、「XはQを知っている」とは言っても、Xが同じ主題に関わる他の命題を全く考慮に入れず、ただQという命題のみを受け入れている状態を指している。例えば、Xが何らかの権威とか伝統だけに頼ってQを受け入れている場合が「受容」の状態に当たるであろう。「意見」の状態とは、Xが同じ主題に関わる複数の命題の中で、どちらかと言えばQを選択する、という状態を指している。つまり、Xが、確かな証拠があるわけではないが、他の命題と比較して、Qという命題がより正しいと思える状態にある

ことを示している。「確信」の状態とは、Xが、確かな証拠に基いて、同じ主題に関わるQ以外の他の命題をことごとく偽であるとして退け、Qが正しいと考えるような状態である。

「受容」、「意見」、「確信」といった三つの「信じる」の状態の違いは、Xが有している証拠が、どの程度Qが確かであることの証しになっているかにある。つまり、「XはQという命題を知っている」とは言っても、Qを権威や伝統によって受け入れているだけの「知る」なのか、どちらかと言えばQが正しい、という程度の弱い証拠しかもちえない「知る」なのか、あるいは自己ならびに他者から提示される、Qの真実性に対する反証命題を偽であるとしてできる限り退けることのできる程の強固な証拠を有する「知る」なのか、「信じる」の深まりの程度に応じての区別をしなければならぬということなのである。このように、プライスの信念論を手がかりとして、「信じる」の深まりを前提とした、事実に関わる「知る」の三条件を新たに提示したのである。

しかしながら、上記のような事実に関わる「知る」——あるいは命題的知識と言ってもよいかもしれない——の枠組に対して、G. ライルが提起した問題を忘れてはならないであろう。ライルは著書“*The Concept of Mind*”の中で次のように主張した。知識は、単に事実に関わる知識、つまり knowing that (以後 k-that と示す) に限定されるわけではない。知識には、それとは別個に取り扱うことのふさわしい、行為遂行的な知識もある。knowing how (以後 k-how と示す) と、事実に関わる知識、すなわち k-that は分けて考えることが必要である⁽⁸⁾ と。彼の提案は、それまでの、k-how は「知識」と呼ぶに値しない、あるいは、k-how は k-that に従属するもの、つまり k-that さえあれば k-how はおのずから獲得できるのだ、というドグマティックな考えに対して強烈な攻撃を与えるものであった。人間の知性 (intelligence) は、k-that だけで定義することはできない、k-how を、それとは独立の資格をもった知識として考えて初

「『わざ』を知る」とは何か

めて人間の知性は定義できる。ライルはこのように考えたのである。彼は、k-how のカテゴリーに入れられる知識の例として、「熟練したコックの知識」と「車の運転の知識」をあげている。熟練したコックが料理を作る場合、彼は頭の中でその料理の手順を順次、命題として思い出さなくても料理を作ることができるし、また車の運転ができるからといって、そのやり方を逐次すべて命題化して言えるわけでもない。また逆に、手順をことごとく命題化して言えるからといって、即料理がうまく作れることが、また運転が実際にできることが保証されるわけでもない。このことは、私たちが日常的に経験する事実である。ライルはこうした例を引用することによって、従来の知識論を主知主義のドグマとして批判し、新たに、単なる“possessing knowledge”とは異なる k-how という知識を提案したのである。

しかし、ここで誤解を避けるために注意していただきたい点は、ライルの主張するところの k-how とは、「こういうときにはこうする」といったプロダクションシステムによって記述できる、条件と行為の対の集合としての、いわゆる手続きの連続としての知識とは異なるという点である。例えば、ある人間 X について、第三者 Y が「X は～のやり方を知っている (X knows how to do ～)」と言う場合、X はまず第一の条件として、“how to” 以下に示されるある種の行為を正しく行なえること、つまり、彼の身体的行為が、ある特定の行為として見なされる基準を充たしていなければならない。しかし、それだけではまだ X が “k-how” の知識を有していると言うには充分ではない。ライルの提案に従うならば、ある人間が “k-how” の知識を有していると言うためには、その人間が当の行為をしながら、その行為について考えることができなければならない。うまく行為するためには、行為している自分をさらに考え、自らの行為をコントロールできなければならないのである。言い換えるならば、自らの行為についての判断や批判を行なうことができなければならないのである。この点におい

て k-how は単なる手続きの連続としての知識とは異っているのである。

こうしたライルの提案以来、J. ハートランド・スワン、J. R. マーチン、V. A. ハワードらが k-how の分類に関連した議論を続け今日に至っている。⁽⁹⁾

これまで、哲学における、「知る」の分析の枠組を概観してきたが、次に、本題である、『風姿花伝』の中に世阿弥によって示されている「能を知る」、「花を知る」といった言明が、上記の分析の枠組によって果して十分に説明することができるかどうか、という問題を吟味していきたい。

(2) 世阿弥の用いる「知る」は k-how か、k-that か

能は明らかに一種のパフォーマンスである。このように考えるならば、演者の立場で「能を知る」とは、ある種の行為を知ること、すなわち k-how の問題として扱うことがふさわしいように思われる。確かに、ライルが提案するような条件を充たしていなければ、演者の立場で能を知っているとは言えないであろう。単に教えられた型を自動的に真似て行為しているのではなく、自らが自らの行為をコントロールしながらよい行為を導き出していくというプロセスがなければ、当の演者が能を知っているとは言い難いのである。

しかしながら、ある人間について「能を知っている」と記述するためには、ライルがあげた二つの条件——①特定の行為たらしめている基準を充たすこと、②自らの行為をコントロールできること——を充たすことで果して充分なのであろうか。この疑問は、「自らの行為をコントロールできること」のさらなる分析を要請するものであるが、ライル自身は、その疑問に対して満足に答えているとは言えない。彼は、「Xは～のやり方を知っている (X knows how to do ～)」と言うためには、Xが自分の行為をコントロールできることが、第一の条件とともに必要条件であるが、コントロールしているプロセスを記述できることは必要条件ではないと主張

『わざ』を知る」とは何か

するのみで、「自己コントロール」の中味については十分な分析をしていない。

ライルの分析の不充分性についてはここで論じる用意ではないが、「能を知る」は、渡辺守章氏の「……能作という言説の実践によって世阿弥の思考そのものが深化を見た……⁽¹⁰⁾」という言にも見られるように、世阿弥という優れた演者が自らの能の知識を数々の伝書の中に見事に記述し得たごとく、単に身体的技能からのみ成立しているのではないように思われる。単純に k-how のカテゴリーに入れて論じることはできないように思われるのである。

それでは、「能を知る」を、k-that の問題として扱うことがより適切であると仮定してみよう。この仮定に従うならば、「ある人間Xが能を知っている」と言い得るためには、第一に、Xが先にあげた引用の中に示されていた「花は心、種は態なるべし」といった命題を含む、演能に関する諸命題が真実であると信じていること、第二に、Xがそれらの諸命題が真実であると信じるにふさわしい証拠を有していること、そして第三に、諸命題が真実であること、という三つの条件が充たされていなくてはならないことになる。しかも、その「知る」には、先に述べたように、「受容」、「意見」、「確信」といった、「信じる」の深まりに応じた段階が想定されるわけである。この段階の違いが、証拠の強さ、言い換えるならば、言論の緻密さにこそあるとなると、すると「能を知る」とは、すなわち演能に関する諸命題を正当化する証拠をいかに強固にするかという問題、つまり自己ならびに他者から提示される対立命題を偽であるとしていかに退け、いかに自ら直しいと信じている命題を正当化することができるか、という問題に環元することができることになる。

確かに、先に引用した渡辺氏の言にもあるように、「能を知る」にはそうした側面もあるにはちがいないであろう。しかしまた、その側面からのみ成立しているわけでもないことも明らかである。なぜなら、なんと云っ

ても、能は一つのパフォーマンスである、という事実が厳然としてあるからである。たとえ演能に関する諸命題をことごとく覚え、なおかつ自らもそれらが正しいと信じていたとしても、実際に舞台の上で能を見事に演じてみせることができなければ、演者が能を知っているとは言い難いのである。これはまさに、主知主義者に対してライルから出された批判でもあるが、言論の緻密さだけを基準として「能を知る」を測ることはできないということなのである。

このようにしてみると、「能を知る」は、単純に k-how の問題とも、また単純に k-that の問題とも言い切れないということ、言い換えるならば、「能を知る」は k-how, k-that いずれかの二分法的な「知る」の枠組ではとらえることができないということになる。現在に至る、「知る」の形態に関する議論を眺望してみると、k-that, k-how の各知識形態に関しては詳細な議論が交されているが、この枠組自体の批判はなされていないとは思えない。例えば、シエフラーのライル⁽¹¹⁾批判にしても、ライルの k-how 分類における難点に焦点が当てられているにすぎない。ライルが“habit” (single track disposition) として k-how のカテゴリーから除外しているものを、シエフラーは“facilities” という名で k-how のカテゴリーに含めているにすぎないのである。ただ、ハワードは、著書“Artistry”⁽¹²⁾の中で声学の知識の規定を試みているが、そこで彼は、声学の知識は単に身体的訓練によってのみ得られる知識ではなく、その知識には「説明する (accounting for) という側面もあると主張し、マーチンによる k-how の分類に修正を加えている。しかしながら、この場合においてもまた、「説明する」が、k-that とどのような関係にあるのかについては触れられておらず、ただ k-how のカテゴリーの中でのみの修正に終わってしまっているのである。

では、「能という『わざ』を知る」は一体どのような知識としてとらえたらよいのであろうか。次章ではこの問題にしばって議論を進めていくた

『わぎ』を知る」とは何か

いと思う。

第二章

先に、『風姿花伝』の中の「第三問答條々」の一節を引用したが、そこでは、「能を知るとは何か」という問題に対して、「花を知ることの一事につきる」という答が示されていた。では、「花を知る」とは一体どういうことなのか。世阿弥は「花を知る」という言明をなすことによって何を言わんとしていたのか。私は、『風姿花伝』に示されている「花を知る」という言明を詳細に吟味することが、能という「わぎ」の体系の知識の形態を明らかにする鍵となると考えるのである。

「花」とは一体何を指すのか。「花を知る」とは一体何を意味しているのか。世阿弥の言明の中にその答えを求めてみよう。先に述べたように、『風姿花伝』はいかにして能を知るかという課題を「花を知る」の一事にしばって追求している伝書であるが、その中でも特に「別紙口伝」では、「花とは何か」、「花を知るとは何か」という問題に焦点をしばって論じている。

そこで、「別紙口伝」の一節を引用してみよう。

『この口伝に、花を知る事、先づ、仮令花の咲くを見て、万に花と喩へ始めし理を（わきまふ）べし。

そもそも、花と云ふに、万木干草において、四季（折節）に咲く物なれば、その時を得て珍しき故に、翫ぶなり。申樂も、人の心に珍しきと知る所、即ち面白き心なり。花と、面白きと、珍しきと、これ三つは、同じ心なり。いづれの花か散らで残るべき。散る故によりて、咲く比あれば、珍しきなり。能も住する所なきを、先づ、花と知るべし。住せずして、餘の風體に移れば、珍しきなり。

ただし、様あり。珍しきといへばとて、世になき風體をし出だすにてはあるべからず。花伝に出だす所の條々を悉く稽古し終りて、さて、申

樂をせん時に、その物数を用々に従ひて、取り出だすべし。花と申すも、万の草木において、いづれか、四季（折節）の、時の花の外に、珍しき花のあるべき。その如くに、習い覚えつる品々を極めぬれば、時、折節の当世を心得て、時の人の好みの品によりて、その風體を取り出す、これ、時の花の咲くを見んが如し。花と申すも、去年咲きし種なり。能も、もと見し風體なれども、物数を極めぬれば、その数を盡す（ほど）久しし。久しくて見れば、また珍しきなり。……ただ、花は、見る人の心に珍しきが花なり。しかれば、花伝の花の段に、「物数を極めて、工夫を盡して後、花の失せぬ所をば知るべし」とあるは、この口伝なり。されば、花とて別にはなきものなり。物数を盡して、工夫を得て、珍しき感を心得るが花なり、「花は心、種は態」と（書ける）も、これなり。

(18)
……』

このように「別紙口伝」の中で世阿弥は、「能を知る」上で最も大事とされる「花」の意味、および、いかに「花を知る」に至るのかを明らかにするよう試みている。

すべての花は四季それぞれの時期に咲くから珍しく人の興味を引く。能もまた、珍しいと感じる所が面白いのであって、「花」と「珍しさ」と「面白さ」はすべて同じものである。稽古で習い覚えた技巧を自由自在に操れるように習練してあれば、時、場所に応じて演技を取り出して見せられる。これはまさに、季節に応じて花が咲くようなものである。世阿弥は、能における「花」の意味は、決して特別な意味をもっているわけではなく、咲く花のごとく、能を習い覚え、時、場所に応じて演じることにこそその意味はある、と説いているのである。

では、世阿弥が「花を知る」と言う時の、「知る」はどのような知識の形態としてとらえたらよいのであろうか。先の引用の最後に示されているように、「問答條々」で世阿弥は「花は心、種は態」という言明をなして

「『わざ』を知る」とは何か

いるが私には、この言明の中に、世阿弥の主張する、能という「わざ」における「知る」の形がいかなるものかを探っていく手がかりがあるように思われるのである。

「種は態」という言明に関して、彼は次のように説明している。態とは身体が覚え込むものであり、能においては、七才より稽古を積むことによって、できるだけたくさんの「態の種」を身体で覚え込み、必要な時に、いつでも使えるように態に磨きをかけておくが肝要である、と。世阿弥が能の真髄としている「花を知る」が上記のことを意味しているのならば、確かに、「花を知る」の「知る」は k-how のカテゴリーに入れても差しつかえないように思われる。

しかしながら、「いつ」、「どこで」、「誰に」見せるかを考慮することは、態そのものとは別種の、世阿弥の言うところの「心」の働きにかかっているのである。「花は心」という言明は実に、「能を知る」には、態とは別種の働き、すなわち時、場所、相手といった状況を考慮する働きが同時に必要であることを示しているのである。状況を考慮する働きとは、「別紙口伝」に「物数を盡して、工夫を得て、珍しき感を心得るが花なり」とあるように、人が能を鑑賞して「面白い」と感じるのは一体何故か、それがどうして生じるのか等、花が花たり得る理の会得を前提とした働きに他ならないのである。

こうして見てくると、世阿弥が用いる「知る」は、「身体」における「態」の「知る」と、「心」における「花」の「知る」の二つの要素から成立するものであると言えよう。つまり、「花を知る」とは言っても、単に物真似ができるようになることのみを意味するのではなく、「態」から出てくる「花」と、「心」から出てくる「花」の、二つの「花」を「知る」ことを意味しているのである。さらに言うならば、「態」から出てくる「花」は、若さや生まれついた声や姿形から出て来るもの、または数多くの稽古を通して錬えられた末に得られるものであり、それだけで、そのままにしてお

けばいつかは散ることはまぬがれない。世阿弥はこの花を「時分の花」と呼び、「咲くころあればやがて散る時分あり」と言っている。

このような「態」から出て来る「花」に対して、「心」から出て来る「花」、すなわち、花が花たり得る理（状況に応じた『面白さ』、『珍しさ』の理由）を会得した心から出て来る「花」は、「咲く道理も散る道理も、こころのまま」なるものであり、この「花」なくしては「誠の花を知る」ことには決してならないのである。能において「花を知る」とは、まさに、「態」から出て来る「花」とそれを支える、「心」から出て来る「花」の二つの「花」を「知る」こと、つまり「花と種」の対、あるいは「心と態」の対を「知る」ことを指しているのである。

世阿弥の示す「能を知る」が、上記のように「花と種」あるいは「心と態」の二つの要素から成立している「知る」であるならば、では、両者の関係はどのように解釈したらよいのであろうか。

世阿弥は、七才より稽古を積んで、物真似の品々を覚え、工夫を積んで初めて、それらの種が花を咲かせるのだと繰り返し主張している。彼はまた、「型より入りて、型より出る」という別の言明の中にも同じ主張を繰り返しているが、能を知るにはまず、物真以の数を重ねること、すなわち型を学ぶことが出発点である、と言う。しかし、どのようにして、種から花が咲くのであろうか。どのようにして型から出ることができるようになるのであろうか。この問いに対する答は次のように考えられるであろう。すなわち、能を学ぶ者が、物真似をすることと言っても、単に「結果真似」に終始するのであれば、それは花を咲かせることなく種のまま朽ちてしまう。種から花を咲かせるためには、あるいは型から出するためには、態の原因、理由を吟味しつつ物真似をすること、つまり「結果真似」ではなく、「原因真似」をすることが必要なのである、どうしてこの態が「面白い」とされるのか、その原因、理由を考慮する努力がなされなければ、たとえひたすら稽古に励んだとしても、結局のところは「結果真似」に終わってしま

「『わざ』を知る」とは何か

う、ということなのである。

M. ポラーニは著書『暗黙知の次元』の中で新しい知識の形態について論じているがそこでの議論は本研究に示唆することが少なくない。彼は、「暗黙知」がいかなる知識であるかを説明するにあたって、「包括的存在」という新しい概念を導入している。先に述べた、態の原因、理由を考慮することは、⁽¹⁴⁾ポラーニの言う「包括的存在を理解すること」に対応していると言えよう。

これは、ライルが攻撃的とした、実践は命題を反復することによって初めてなされるというような考え方ではもちろんない。がしかし、世阿弥が「花と種」の関係の比喻で示しているように、能の実践の背後には必ず、原因、理由を知る、言い換えるならば、当の態を正当化するに十分な証拠を有するという k-that のカテゴリーに入れられてしかるべき知識が存在していることを認めないわけにはいかないのである。演者は、自分がよしとする態に関わる命題がいかに正しいか、自己ならびに他者から示される様々な対立命題を偽であるとして退けることによって初めて態の質を高めていくことができるのである。ただ稽古を積み、それだけで能が完璧な形で習得されるわけではない。態の習得プロセスの背後には、演能に関わる「命題的知識」が tacit に裏打ちされていなければ種はいつまでたっても種のままで、永遠に花を咲かせることはできないのである。

このように、「能を知る」における「種と花」との関係、「態と心」との関係は、ライルの主知主義者に対する批判にある “to do a bit of theory, and then to do a bit of practice” というような並列的な関係ではなく、むしろ、一つの知識の中にある二つの相の有機的関係としてととらえることが適切であろう。この関係はまたポラーニの主張する、「諸細目」と「包括的存在」の関係に対応するものとして考えることができるであろう。

しかしここでまた注意していただきたい点は、上記の実践の背後にある「命題的知識」とは、自らの行為を逐次、記述的に言語化できることに限

定されはしない、という点である。これは、もし、当の主題に関わって論議されるべき事態が生じた時に、正当な言明をなし得るということの意味しているのである。つまり、行為している人間が、言明を絶えずしているということではなく、機に応じて言明し得るということなのである。さらに、そのような機に応じてなされる言明は、必ずしも記述的な言明である必要はない。表現上、修辭的な形態を取ることも充分あり得るのである。つまり、自らにとって正当な言明をしようと思えばこそ、ときには独得な表現を工夫することもあるのである。⁽¹⁵⁾

このように、上記のような意味での「命題的知識」が、tacit に態に裏打ちされていて初めて、「演者は能を知っている」と言い得るのである。

む す び

これまで、『風姿花伝』に示されている「能を知る」の形態を、世阿弥の演能に関わる諸言明を吟味することによって、明らかにするよう試みてきたが、この時点で、次のようにまとめることができるであろう。すなわち、『風姿花伝』に示されている「能を知る」という言明の「知る」は、「命題的知識」に tacit に裏打ちされたところの「技能的知識」であるということ、しかも、この二つの知識は、並列的な関係に位置するのではなく、むしろ一つの知識の二つの相を表わしたものである、ということである。さらにこの二つの知識は、互いに検証し合う関係にあるとも言えよう。つまり、演者が有している「命題的知識」の確かさは、実践のレベルで自他共に確かめられ、また一方実践の確かさは、背後の命題のレベルに戻ってその適切さを確かめられる関係にあるのである。そして両者間の往復運動が支障なく行なわれることこそが、まさに「花を知る」に至る道、すなわち「能という『わざ』を知る」に至る道であると考えられるのである。

本稿で提示した新しい知識の形態については、今後認知心理学との協働

「『わざ』を知る」とは何か

作業によって、確められ、また修正されていくであろう。例えば、心理学での最近の「創造性」の研究は、今回の議論に重大な示唆を与えてくれている。D.N. パーキンスは、“The Mind’s Best Work”の中で、人間の「創造的瞬間」について次のように論じている。⁽¹⁶⁾ 従来、洞察というものは、drastic に、しかも無意識のうちに促されると考えられてきたが、創造的な作品を生み出した人間のプロトコールを取ってみると、その背後には、論理的な思考のステップが見られる。洞察に神秘的な特殊なプロセスがあるわけではない。無意識的なプロセスでも、瞬間的なものでもなく、“reasoning”こそが洞察に至る道なのである、と。このようなパーキンスの議論は、一般に、創造性が多分に含まれていると考えられる芸術一般あるいは「わざ」と呼ばれる領域についても当てはまるのではなからうか。

能のみならず、日本の伝統的芸能の多くは、従来、言葉では伝えられない世界であり、したがってきっちりとした教授課程があるわけではなく、学習者は教師から芸を「ぬすむ」ものだ、という考え方が支配的であったように思われる。あたかも、身体を見よう見まねで動かしていさえすれば、ある時突然に、当の「わざ」を知ることができるのだと考えられてきたように思われるのである。確かに、現象面のみをとらえてみれば、そのように思われても仕方のないことかもしれない。しかも、「わざを知った」学習者が、どのようにしてそこに至ったのか、そのプロセスを記述的に言語化できないとすれば尚更のことであろう。

しかし、世阿弥の諸言明にも示されているように、「『わざ』を知っている」人間の「知る」のプロセスに光を当ててみると、実は「命題的知識」が tacit に累積されていたからこそ、教師の「わざ」がぬすめたのであり、自ら「『わざ』を知る」ことができたのだと考えないわけにはいかないのである。ただ教師の物真似（結果真似）ばかりしていても、それだけでは永遠に「わざ」をぬすむことはできないのである。つねに、自ら実践する「わざ」の正しさの原因、理由を命題のレベルにおいて確かめるとい

うプロセスが同時になければならないのである。こうした「『わざ』を知る」の形態を、世阿弥は見抜き、「花は心、種は態なるべし」という言明に集約させたと私は考えるのである。

本稿では、「『わざ』を知る」の形態を明らかにするための一つの手がかりとして、『風姿花伝』の中で世阿弥によって示されている「花を知る」という言明の分析を試みたが、今後の課題として、ここで提示した「知る」の形態が、果して「『わざ』を知る」の一般的形態であるか否かの検討および検証が、また事実に関わる「知る」の形態との関係の明確化が、認知心理学をはじめとする他の領域との協働によって進められなければならないと考えている。そして、こうした研究を進めることによって、従来、無意識的な要素を多分に含むプロセスであり、したがって言葉を介して伝えることは困難であると考えられてきた「わざ」の教授が、客観的な知識の問題として科学的な議論の対象となることが可能になると考えるのである。

註

- (1) 世阿弥『風姿花伝』 岩波書店 1982, p. 58-59
- (2) プラトン『テアイテトス』 岩波書店 1981, p. 202
- (3) Ayer, A. J. "The Problem of Knowledge", 1956 (神野慧一郎訳, 『知識の哲学』 白水社 1981, p. 42-48)
- (4) Chisholm, R. M. Theory of knowledge, 1966, (吉田夏彦訳 『知識の理論』 培風館 1980, p. 31)
- (5) Sheffler, I. "Conditions of knowledge", Scott, Foresman and Company, 1965, p. 21
- (6) Price, H. H. "Some consideration about belief", Proceedings of the Aristotelian Society, vol 35 (1934-5)
- (7) 生田, 舟山, 山口「問題としての『知る』」 第24回教育哲学会, 1981
- (8) Ryle, G "The Concept of Mind" Penguin Books, 1949, p. 28-32
- (9) Hartland-Swann, J. "The Logical Status of Knowing That", Analysis 1956

『わざ』を知る』とは何か

- ・ Martin, J. R. "On 'Knowing How' and 'Knowing That'", *The Philosophical Review*, 1958
- ・ Howard, V. A. "Artistry" Hackett Publishing Company, 1982

ライルの提案に対して、ハートランド・スワンは、k-that の知識はすべて、k-how の知識に環元できると主張した。例えば、"J. knows that Columbus discovered America" は、"J. knows how to answer the question who discovered America", あるいは、"J. knows how to answer the question what Columbus discovered" といった言明に言い換えることが可能であると主張した。

しかしながら、ハートランド・スワンの主張には、次の点で限定が伴っていた。つまり、k-that が事実命題である場合には確かに、k-how に環元することができる。しかし、例えば、"J. knows that he should be quiet when someone is speaking" といった規範に関わる命題の場合には、単純に、「答えることができる」という言明に置きかえることは難しい。マーチンはこの難点を指摘し、"knowing" を capacity verb である場合と、tendency verb である場合の二つのカテゴリーに区別した。さらに、capacity verb である場合の k-how を A B C の三つのタイプに分類した。Type A は、技能や能力に関する、practice を必要とする k-how である。Type B は、事実命題に関する k-how で practice は必要としない。Type C は、例えば、"J. knows how the accident happened" といった、A にも B にも入らないがやはり "how" を使って述べられる k-how である。

ハワードは、マーチンの分類を基本として、「芸術の理解」の分析を試みている。ハワードは、「芸術の理解」は、声学の事例からも明らかのように、マーチンの分類の中の Type A と Type C の二つの要素を兼ねそなえていると考えた。つまり、「芸術の理解」は、practice が必要であることはもちろんであるが、またそれと同時に、説明する (accounting for) 能力を伴った知識であると主張した。

- (10) 渡辺守章「美しきものの系譜——花と幽玄」『講座 日本思想 5 美』相良他編，東大出版会，1984，p. 299
- (11) Scheffler, I. 前掲書，p. 95-101
- (12) Howard, V. A. 前掲書，p. 70
- (13) 世阿弥，前掲書，p. 92-94
- (14) Polani, M. "The Tacit Dimension", Routledge & Kegan Paul Ltd., London, 1966 (佐藤敬三訳『暗黙知の次元』紀伊国屋書店，1980，p.28-29)

- (15) 「知識」における修辞言語の役割の問題は重要な問題であり、場所を改めて詳細な議論を試みたい。
- (16) Perkins, D. N. "The Mind's Best Work", Harvard University Press, 1981, chapter 6.

参 考 文 献

- (1) 中山一義, 「花と幽玄と器と」, 『哲学』第41集, 1961
- (2) 中山一義, 「年来稽古」, 『哲学』第42集, 1962
- (3) 中山一義, 「命には終りあり, 能には果てあるべからず」, 『哲学』第43集, 1963
- (4) 中山一義, 「花の公案」, 『哲学』第44集, 1963
- (5) 中山一義, 「花伝或問」, 『哲学』第50集, 1967
- (6) 中山一義, 「花と稽古の論理」, 『哲学』第60集, 1972
- (7) 中森晶三, 『能の知恵』, 玉川大学出版部, 1976
- (8) 原 太郎, 『花伝書考』, 未来社, 1983
- (9) 後藤 淑, 『能と日本文化』, 木耳社, 1980